

ことば村・ことばのサロン

■2023・2月のことばのサロン

▼ことばのサロン

「ウクライナのことばと暮らし」

- 2023年2月25日（土）午後4時—5時
- Zoomによるオンライン開催・座談会
- 出席者：ドローシナ・アナスタシーヤさん（ウクライナ留学生）
西川勝先生（茶道教授者）
コンフォロヴィチユ・イゴリュさん（ドローシナさん友人）
- 司会：井上逸兵（ことば村村長・慶應義塾大学）
- 参加：49名

当初アナスタシーヤさんと井上村長との対談を予定していましたが、当日裏千家・西川勝（篤庵）先生とウクライナ留学生のイゴリュさんが参加、初めは西川先生との対談、次いでアナスタシーヤさん、イゴリュさんが加わって座談会形式となりました。

1. 対談 西川勝先生・司会：井上村長

日本文化の基盤にお茶の文化がある

司会：ご紹介します。西川先生は茶道の先生で、アナスタシーヤさんは先生の孫弟子にあたります。先生はソ連時代からモスクワはじめ旧共産圏各地で日本文化としての茶道を広めていらっしゃった方です。先生、このお仕事はどのように始まったのですか。

西川：前の裏千家家元でした鵬雲齋宗匠は、先の大戦のとき特攻隊員でした。その時の体験から世界平和の実現を祈願され、世界に茶道を紹介し、ひろめる活動を始められました。それはやがて日本の外務省や各地の大使館が実施する日本文化紹介の活動と歩調を合わせるようになり、世界中に広がっていきました。私はその活動に参加させて頂き、ソ連時代の1991年、海外派遣講師としてモスクワに赴きました。その後ロシアのペテルブルグや他の都市、次いでヘルシンキ、チェコ、ハンガリーなどにも。当時、共産圏には日本に関する情報は少ないとされていましたが、実際は、公式の情報の他に口コミによる情報網があって、日本文化の情報への関心にはかなり高いものがありました。

例えば、ブルガリアでの経験ですが……、1992年、在ソフィアの日本大使館が日本文化の紹介の一つとして茶道を取り上げ、デモンストレーションを企画されました。私はそれを担当させて頂きましたが、会場はソフィアを中心に在る文化宮殿の広い一室が用意

されました。そこは広くて気持ちの良い部屋でして、椅子が50脚ゆったり並べられ、お茶室にお客様をお招きするにふさわしい雰囲気を用意されていました。ところが、いざ会場を開けて見ますと、“来るわ来るわ!”どこで知ったのか分かりませんが、沢山の市民がその会場に入ってしまった。広い窓辺にはびっしり人が並び、きちんと並べられた椅子の間の床にも人々が座っている、ということで、主催者としてはどうすることも出来ない事態になりました。それでも大使の挨拶に続いて私はお茶の話を進め、その企画としては良い成果を開けることが出来ました。後で聞いたところでは、主催者の大使館としては数十名の人たちにご案内を出しただけで、特にPR活動をしたわけでは無かった、とのこと。しかも来場された方々は、首都のソフィアばかりでなく、ブルガリアの地方都市から来られた方もかなり有ったようです。大使館も私もブルガリアの人々の日本文化への関心の大きさに驚いたことでした。

司会：そのような機会にはどんなお話をなさったのですか。

西川：一つの例ですが、まず聴衆に、「皆さんは何か知っている日本の言葉がありますか?もし有りましたら何でも良いですから一言大きな声で言って下さい。」と投げかけますと客席からは、“ニッサン”、“トーシバ”、“ソニー”などと返ってきます。これは当時沢山の都市の会場で試みましたが、ほぼ同じ反応がありました。これは、その頃の日本が強かった車と電気製品ですね。日本の製品はその質の高さで良く知られていました。それで私は続けました。「日本がそれらの製品を生み出す高い生産技術の背景には、日本の伝統的な文化的基盤があります。そして、その中心に茶道が在ります。今日はその茶道を皆様にご紹介しましょう。ところで、皆さんはご自宅にお客様をお招きして、一緒にお茶を飲み、お客様とお話しをして楽しい一時を過ごす、ということをしませんか?」すると聴衆はうなずき、微笑んで「します」という肯定の意志を示してくれます。こんな事から茶道はどのような事が行われるのか、実際にお点前をして見せました。あるいは、この茶道の中で使われるお茶が、多様なお茶の種類の中で、最も貴重であり、ほとんど日本でしか飲まれなくなっている“抹茶”という“粉のお茶”であること、など、茶道の具体的な内容を説明しました。そして、最後には必ず掛け軸を使い、茶道の基底にある精神的な、あるいは、哲学的な意義についても触れておきました。

司会：お茶の日本語、お茶のことばについてはどのように。

西川：お茶室の中で使われる日本語は、正確で、質の良い言葉が使われています。そこで、私はお茶室の中で使える外国語を目指しました。英語は中学から大学まで勉強しましたが、決して悪い成績ではありませんでした。でも、ほとんど実用的に使えるものでは有りませんでした。それで改めてお茶室の中で使える英語を勉強しなおしまして、ある時その専門のゼミに参加して、自分の勉強した英語のレベルを確認しようとした事が有ります。それで、その時のゼミの開会の挨拶がネイティブの話す英語で行われましたが、それが一言ひとこと、ゆっくり、丁寧に、文法的にも正確に分かりやすく話されました。それは当にお茶室で使うにふさわしい美しさがありました。私はそれに強く感動したことがあり、今

も忘れることが出来ません。その意味でお茶の世界に於いては、日本語、外国個の違いはあっても、共通する言葉の質があると思います。

司会：フォーマルなことばということですね。

西川：はい、そういうことになりますが、そんな言葉がお茶の心のスタートだと思います。

司会：お茶を入りに、お茶を介してことばを伝える。ことばを介してお茶の心を伝える、ということですね。

ロシアの友人達への思い

司会：ソ連が崩壊した後も、旧共産圏におでかけになっていますよね。

西川：はい、私には、先にお話しましたように、旧共産圏の国々に、沢山の茶道の教え子が居ます。当然ロシアにも！ 彼等は皆私が国境を越えて指導した茶道の仲間です。その意味でなんの区別もありません。それで、昨年二月末ロシアのウクライナ侵攻が始まった時、まずウクライナの皆の無事を祈り、難民の受け入れに動きました。でも同時に、ロシア国内の状態を想い、ロシアの仲間が何を思っているか！ 私はそれを考え、説明の出来ない重い感覚に囚われてしまいました。何しろその彼等がこの戦争をどのように考えているかは、改めて彼らに聞くまでもなく、私には明確に分かる事ですから……！ そして、過去の経験から、その時点でロシア社会では個人的な自由な発言も、些細な情報の交換すらも、危険な状態になっていることも、私には即座に想像できました。

ロシアのウクライナ侵攻後、日本はすぐに、ウクライナ難民の受け入れを表明し、その仕組みを作りました。しかし、戦争に反対するロシア人達にはそういう仕組みは適用されません。難しいことではありますが、そんなロシア人も沢山のいて、その中には私の教え子やその子供を含む家族もいるのです。私にはとても辛いことです。本当に戦争はしてはならない事ですし、一日も早く止めて欲しいと思います。

2. 座談会

西川勝先生、ドローシナ・アナスタシーヤさん、コンフォロヴィチュ・イゴリユさん

司会：井上村長

ウクライナの人々から見るロシア語

司会：ここからウクライナからの留学生、ドローシナ・アナスタシーヤさん、コンフォロヴィチュ・イゴリユさんに加わっていただきます。アナスタシーヤさんは愛称ナスチャさん、法政大学に留学中です。ナスチャさん、ウクライナ語はロシア語に似ていると言われますね？ウクライナの人々から見て、どうですか。

ナスチャ：ロシア帝国からソ連時代、ロシア語が強制されましたが、ウクライナ語の存在が知られてきました。実はウクライナ語が一番近いのはベラルーシ語で、ロシア語ではありません。もちろん同じスラブ系のことばではありますが。ウクライナ語とロシア語は語彙

レベルでは大分違いますし、発音も違います。格変化もロシア語は6つ、ウクライナ語は7つです。

司会:ゼレンスキー大統領はロシア語もできるわけですね。でもウクライナ語でメッセージを出す。使い分けているのでしょうか。

ナスチャ: そうだと思います。以前は芸人でしたからロシア語も使っていた、でも今はウクライナ語だけです。彼はインタビューでロシア語の単語が思い出せないことがあるとも言っていました。「何というのだったけ？」と。感動しました(笑)。

ウクライナ語への切り替えが進む

司会: ロシア語に対して人々はどんな感情を持っていますか。

ナスチャ: 若い人々は特にロシア語は使いたくないと。私の母を含め、ソ連時代ロシア語で教育を受けた世代も切り替えようとしています。人生の大半ロシア語で話してきた人々にとって、難しいことですが、ニュースなどでも、「間違えても大丈夫、話しましょう!」というメッセージを流しています。

イゴリユ: 私はロシア生まれでずっとロシア語を使ってきました。今ウクライナ語に切り替えようとしています。両親はウクライナ語が話せないですが・・・。

西川: ウクライナ語を取り戻しているのです。ウクライナがソ連から独立した直後のことですが、キエフの大学で茶道について講義をする機会がありました。それで、モスクワから通訳をしてくれる生徒も一緒に行ってもらったのですが、大学の人からは、私にロシア語ではなく、日本語で話すように要望されました。そしてそれをウクライナ語に通訳する、というのです。もちろん私は日本語でしか話せません。そして、茶道の事について詳しくない人の通訳では困ります。そこで、私の話を同行した生徒がロシア語に訳し、それをウクライナの人がウクライナ語に訳すことにしました、そんな経験があります。そのときの実は、私の話がロシア語に訳された段階で、聴衆全部が内容を理解していることが直ぐ理解出来ました。それでも、私の話はウクライナ語にも翻訳されていきました。

当時からウクラテナでは、脱ロシア語が始まっていたのです。

このように、20年前の独立の時から、クリミアや東部、南部だけではなく、ウクライナ全土でことばのせめぎ合いが続いてきていると思います。

そんな実態を、武力で解決できるでしょうか? ウクライナの中にはロシア語を日常の言葉として使っているイゴリ君のご両親のような人も沢山あるのです。そして、この問題は、それぞれの言葉を話す人達が、毎日の日常生活をどう生きるかに直結しているのです。それが現状であり、この事実を十分に理解しなくてはならないと思います。

日本の中の日本語・世界の中の日本語

司会: ウクライナでは外国語教育はどのようになっていますか。

ナスチャ: キーウには小中高の言語学校があって様々な言語を学べます。大学には日本語

学科があります。

西川：世界各国の日本語教育は、当初国際交流基金から沢山の国々に、日本人の日本語の教育指導者が派遣されました。そうして次第にその派遣された日本人の指導者に代わって、それぞれの国の人たちの中から、日本語の指導者が育って来ました。結果としてその指導者が増え、自然日本語を勉強する若者が世界的に増えていると思います。

そこで、一つ日本語の特性とも言えることが顕在して来ています。それは、日本語を学ぶには、必然的に日本文化を学ばないと、十分日本語が使えない、ということです。もちろんこれは日本語に限ったことではないとは思いますが。しかし、その言葉の国、社会の中で、その言葉を実際に使う上では、自然その文化と言葉の結びつきの在り方や、その強さの程度を考えることになります。特に日本語はその文化との結び付きが強く、他にその例は少ないと思えます。つまり、色々な言語について、言葉とその言葉を使う国や社会との結びつきを考えてみる、そんな視点が必要になっています。

そうしてみますと、日本語の場合、日本の生活文化に繋がることばが茶道には沢山ありますので、まずお茶の世界の言葉をするには、日本語を上手く使えることに繋がるともいえます。実例は丁寧な日本語です。そこで、日本に来る外国人はその文化を真摯に学ぼうとしています。私は海外でも、日本でもそんな外国の若者を沢山みてきました。その経験からすると、この事実について日本人がその実態を知らないと思います。ことば村で、そのことを認識していただければ嬉しいです。

司会：日本の中の日本語、世界の中の日本語ということですね。我々にとって重要な課題です。

ウクライナを表わすことば

司会：ナスチャさん、最後に、ウクライナ語の中で好きなことば、ウクライナ語を表わしていることばは何かありますか。

ナスチャ：あります。「パン」＜パリャニツツァ＞です。この発音はロシア語話者にはできません。

ですから発音してもらえばロシア語話者かどうかわかります。それとウクライナは小麦の国ですから。

司会：なるほど。「パン」には戦時下の今ならではの識別の思いと、小麦、穀物の国・ウクライナという象徴的な意味があるのですね。

今日は時間が来てしまいましたが、また機会を設けて続編のサロンを開けたらと思います。ありがとうございました。

以上
文責・事務局